

現代の子育て実情と支援のあり方を探る

— 実践活動からの考察と試み —

○西澤 幸子 山田 秀子 金田 美知子 山田 順子

1] はじめに

私達が発表する「子育て支援」とは、行政が行う支援や、母親がつくる子育て自主サークルや、幼児教室等のそれとは大きく異なるものである。

確かな事実を指摘することはできないが、支援の多くが最近、親自身の都合により出産後間もなくから、子育てを手放すための援助につながる方策や、仕組みに主眼を置いているように見受けられる。これらは子どもと向かい合い、責任をもって子育てをする親や、育てられる子どもの心情に着目したく本来あるべき姿の子育てへの支援の目的とは、かなりのずれがあるように思われる。

私達が行なってきた過去20年間の子育て支援は、本来の親子関係習得を基盤に置いて、子育ての実情をふまえその対応策を試みつつ現在に至ったものである。

2] きっかけ

私達が幼稚園教諭をしていた時に、子ども側の姿を観察し指導することを中心としていたが「親が変われば子どもも変わる」ことを常に感じていた。近年は幼稚園教育も家庭との連携が大切とされている。しかしやはり親の教育には限界があり、この枠を超えた活動として「親子を切り離さないで共に遊び、子育てについてを学び合う会」を企画し「教師も共に学習する場」を意図的に設定し、その実践に取り組んできた。この間「親が生き生きとすることによって、子どももイキイキとなり、快い親子関係が成立する」という確信を得ている。又この活動は結論のない仕事と、とらえつつ、今回の発表を行なうものである。

3] 子育て支援の基本方針（まつばっくり会）

①親として、大事な宝・いのちを育むという自覚と自信がもてるようにしていく。

②親と子が一緒に生活することが楽しいと感じるようにしていく。

上記2点に於て、自分が生んだ子どもを育てるという当たり前のことを成し遂げるについては色々迷いがある。親自身は精神不安定に陥ることも多いが、生んだ以上は子どもと向き合って生きていかなければならない。この親の思いを否定するのではなく、その心情も受け止めたり、認めたりしつつ前向きに子育てができるよう支えていくことを心がけることとしている。

4] まつばっくり会の活動

- | | |
|----|--|
| 時間 | 毎週1回・または2回 午前10時～12時 |
| 対象 | 0才～3才（幼稚園就園前）の幼児とその母親（ほとんどが専業主婦） 会員数は約60組 |
| 場所 | 東京都小平市にある企業内幼児施設の保育室・庭・ホールにて 大勢の親子で群れる場 |
| 内容 | ごく普通の生活を、繰り返し地道に行なうことを、活動の中心となるものとしている |
| | ・親子で色々な遊具を使って自由に遊ぶ
砂遊び、ままごと道具、絵本、幼児用車、小麦粉粘土、ぬいぐるみ、引き車、フープすべり台など |
| | ・全員一緒に親子スキンシップ活動をする。
リズム遊び、ペープサートや紙芝居を見るおやつを食べる |
| | ・スタッフは個別に母親に声をかけコミュニケーションを図ったり、自由に遊ぶ中で個別相談を受ける |
| | ・親子共に年1～2回は、お楽しみのイベントも実施し、その効果を挙げている |

※特に満3才になった子ども同士の関わりについては幼稚園（現在は「なかよし学園」・3才児）との交流の場を意図的に設定している

※その他、市の障害者センターとの交流や、市の健康センターとの連携などを行なっている

5] 子育ての実情・その問題となる事例

A. 人まかせの子育て＜子どもに関わりたくない＞

事例1 F子の遊びを見ているだけで関わらず、F子が働きかけても、他の母親とおしゃべりに夢中になり気づかない母親。親子で絵本を見ているとき語りかけながら見るのではなく、図の名称を質問して答えさせる。

事例2 言葉・身体の発達の遅れを持つ子どもに対して、他施設などに依存し治療のみに目を向けており、親として子どもに働きかけをしない場合がある。例えばN子（筋弛緩）にすべり台の階段を上することを要求し、ボール遊びをしていたN子のボールを取りあげてしまう母親。それに対しN子は嫌がる。又幼児用車にまたがって遊ぶ子に興味を持っていたのでN子も乗ってみよう勧めるが、親は危ないと言う

B. 成長に伴っての戸惑い＜年齢を追って＞

【0才～1才半】

事例3 幼児用車に興味を持ち、這って車を追うK男の動きに驚く母親。「家では全然動こうとしないんです」と言い、子どもの姿を良くつかめていない。

◎社会で働いていた女性は子どもと2人だけの昼間の生活に、社会から取り残された気持ちで焦りを感じ、また大人との会話のなさに不安を感じる子育てが始まったばかりで赤ちゃんのことが分からない。

【1才半～2才半】

事例4 片づけやおやつの時間に集まらず、泣き叫ぶS子に親はカーッととなっているが、そのうちに母親自身も泣き出す。

◎何でもイヤイヤで自我の芽生えた我が子に対して母親は苛立ちを感じ、このままの状態が続くのではと不安になる。他人に子育てを依存したくなる。

【2才半～3才半】

事例5 いきなりおもちゃ道具をひっくり返し、物を投げたり、キーキー言うK男。集まるよう声をかけると、K男は逃げ回り隠れる。母親は他人の目を気にして手に負えず、途方にくれる。

事例6 靴下をなかなか履かないS男に口だけで指示し怒る母親。そのうちS男がその場から走って逃げだすと「うちの子逃げちゃったんです」と言うだけで、つかまえて履かせようとはせず怒っている。

◎自己主張が激しく協調することができない我が子に母親は対等になって怒る。母親に対する依存心はまだ強い時期であるが、母親はなるべく早く手放したくて働きに出ようとしたり、就園させようとする。

C. 3才児入園の迷い・不安

◎子どもは課題を多く与えられ、到達目標を立てられた中で、ゆったりとしたセルフコントロールができなくなる。親は目標を立て、子どもを追い立て、うまくできないという焦りばかりを感じる。

6] 考察

親の変容（心の動き方）は子どもの成長と大きく関わってくる。特に生後～およそ1才半までは母親依存の状態、親の自己満足の上に日々の生活は過ぎていくので、両者とも（家族も）安定した子育て期になるはずである。1才半～2才半頃に現れる子どもの自我（自立の一期）の発露に（一般的には第一次反抗期）両親共がうろたえ、特に日々の生活の細部を受け持つ母親としては大変な苦痛を負わされることになる。

多くの一般育児書にも第一次反抗期の現象が挙げられており、子どもの反抗は正常な行動と見なされる筈であるが頭で理解していても、親の感情として許し難いものがある（周囲への気遣い、格好づけなどによる）

この時点で家族、特に父親がこの現象（イヤイヤを示す）について、しつけ方が悪いなどと母子の関係にのみ着目している場合の問題が、子育て中の最大の悩みであり、表面にも出てこない子育て不安の原因であることを突き止めた。

また2才半～3才半（3才児入園前）には、子ども同士の交流を急いだため、未だ十分に母子分離のできない状態にいる子どもを保護下から離し、子どもの心を不安にさせてしまう場合も多く見られる。しかし、満3才半を過ぎると、親子の遊びより子ども同士の関わりに興味を持つことから、親と離れた遊びの場を設定することが、子どもの成長に有効である。

7] 支援方法のまとめ

- ・年齢ごとに変わる我が子の姿の「ありのまま」を受け止めることや「子どもの思い」を母親に伝えること。
- ・子どもが安心して落ち着いて遊んでいるときや、親が上手に遊ばせているときは、誉めること。
- ・スタッフへの信頼感を構築するために、挨拶など基本的なコミュニケーションは忘れない。
- ・誰でも公平に受け入れる気持ちで接すること。
- ・母親からの相談に対応するときは、一方的にアドバイスをするのではなくカウンセリングマインドで、親の立場を理解しながら話すこと。

なによりも、スタッフ自身が自然体を心がけることである。

8] 試行と提案

3才児を年度の途中で幼稚園に入園させる試みは、4年間続けられこの成果は大きかった（'94年～'97年）

初年度こそ今までの慣例にとらわれ、4月入園の方が良いのではとの迷いもあったが、9月よりの入園で生き生きと自己発揮をする子どもの姿に、母親が安堵した。又 '95年・'96年の保護者（母親）自身が伝え合う懇談会などにより、その成果を安定したものにした。残念ながら企業内の事情により、この幼稚園は閉鎖されることになり、この試みが中断されてしまったが、まつばっくり会の多くの保護者から、この方策を惜しむ声が挙がっている。

子育て支援のあり方は21世紀に向かって翔く子どもの、伸びやかな育ちを基底としたものであるよう願う。